

氏名	木村大治
学位の種類	理学博士
学位記番号	理博第1256号
学位授与の日付	平成2年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
研究科・専攻	理学研究科動物学専攻
学位論文題目	SOCIAL INTERACTION AMONG THE BONGANDO IN CENTRAL ZAIRE (中央ザイール・ボンガンドにおける社会交渉)
論文調査委員	(主査) 教授 西田利貞 教授 伊谷純一郎 教授 田中二郎

論文内容の要旨

本論文は2編からなり、中央アフリカ・ザイール共和国の焼畑農耕民ボンガンドを対象に、その日常的な社会交渉を、動物行動学などの分野で発達したサンプリング法を用いて、分析したものである。

主論文Ⅰでは、6人の情報提供者の半年間にわたる自らの活動のサンプリング・データにもとづき、まず、彼らの日常活動の時間配分や日周活動のリズムなどを分析した。さらに、日常的な集まりにおけるグルーピングの頻度、活動の場所、挨拶行動などについても詳細な分析を加えた。その結果、(1)彼らは社会交渉に対して予想以上に多くの時間を費している。(2)男性は多くの相手と広く、浅いかたちで対面的社会交渉をもつが、女性は特定の相手、とくに婚家と自らが出生した家族に集中して交渉をもつ。(3)異性間の近接の頻度は少ない。(4)150-200m以内に住んでいる人々の間に挨拶行動は見られず、彼らの間では対面的社会交渉とは別の構造ともいえるべき、非対面的社会交渉が存在していることなどが明らかになった。

主論文Ⅱの主題は、ボンガンドの人々の間で成立している非対面的社会交渉を支えていくと考えられる大声の発話である。申請者は、彼らの発話の生起頻度のデータとその様式と内容の記載にもとづいて、ボンガンドの音声的社会交渉、とくに「相手を特定しない大声の発話 (Addressee-Unspecified Loud Speech: AUL 発話)」を分析の対象とした。ボンガンドの人々はしばしば相手を特定することなく、大声でAUL発話を行う。この行動は調査者の目には異様にさえ映るが、彼らにとっては日常的な活動の一つである。彼らはAUL発話によって、自らの感情の発散、不満の表明、意見陳述などをいわば「自分勝手」におこなう。しかし発話の内容は、聞き手が無関心を装うことによって、社会的齟齬を引き起こすことなく、彼らの社会交渉の慣習的枠組みの中に取り込まれていく。すなわち、話し手が対話の相手を特定せず、また聞き手もその話を聞いたかどうかを曖昧なままにしておく点こそがAUL発話の大きな特色と結論することができる。このようにAUL発話は、形式、機能ともに従来研究されてきた通常の会話とは著しく異なるが、主論文Ⅰで示したように、ボンガンドの社会では、彼らの非対面的な社会交渉を支え

ているなど、重要な機能を果たしており、人類の音声的社会交渉の多様性を考える上できわめて興味深い事例であるといえる。

参考論文2編のうち、1編はトカラ列島の小離島における日常的社会交渉を、「集まり」の構成を中心に分析したものである。また他の1編は、同じくトカラ列島の離島において野生化したウシの個体群の社会構造を、行動域形成とグルーピングに注目して分析したものである。

論文審査の結果の要旨

これまでの人類学的研究は、人間の活動や相互交渉、あるいはグルーピングの構造などを分析する場合に、言語を用いて収集・記録されたいわば定性的な資料にもとづく傾向が強く、定量的な分析に欠けるきらいがあった。一方、近年になって動物行動学や霊長類学では、行動や社会交渉などを定量的に分析するため、サンプリングの方法が飛躍的に発達している。申請者は、アフリカの焼畑農耕民ボンガンドの社会を分析するにあたって、これらのサンプリング法を導入した。しかし、既成の方法をそのまま採用するのではなく、人類学的手法として多くの新機軸を創出しており、その方法論的な価値はきわめて高いものがある。

主論文Ⅰでは、焼畑農耕民の日常活動の時間配分やリズムについて詳細な分析を進め、定量的な資料に基づいて、彼らが生業活動に費やす時間は少なく、多くの時間を社会交渉に費しているという興味深い指摘をおこなった。さらに社会交渉において著しい性差が認められること、異性間の近接の頻度は少ないことなどを明らかにした。こうした発見は申請者の緻密な資料収集と分析によって初めてもたらされたものであり、高い評価が与えられる。申請者はさらに、近隣に居住している人々の間には挨拶は見られないことから、彼らの間では非対面的な社会交渉が存在していると結論した。

一方、非対面的な社会交渉の構造を支えているものとして、主論文Ⅱでは音声コミュニケーションがとりあげられている。申請者は発話を定量的に解析するなかで、「相手を特定しない大声の発話（AUL 発話）」という発話行為の存在を明らかにした。この発話行為は様々な社会的機能を果たしており、とくに近隣で居住している人々はこうした大声の発話によって、非対面的社会交渉を維持していることが示唆された。この発見は、人間の発話行為の研究において、従来の社会言語学などが見逃してきた側面を指摘したものである。とくに、AUL 発話を分析するにあたって申請者が用いた「投擲性」の概念は、今後、会話を含めた人類の音声コミュニケーションを分析する上で、無視することのできない貴重な知見であるといえる。また参考論文は申請論文に対する予備的な意義を有するとともに、申請者の高い創意と多岐にわたる研究能力を示している。

よって、本論文は理学博士の学位論文として価値あるものと認める。

なお、主論文および参考論文に報告されている研究業績を中心として、これに関連した研究分野について試問した結果、合格と認めた。